

保險企業の競争と獨占

——利潤よりの人間開放——保險よりの人間開放——

小林 北 一 郎

一、序 説

經濟的な競争や獨占が、現代的意義を獲得したのは、資本主義社會が成立した以後のことであつた。保險企業に於ける競争と獨占が問題となつてきたのは、現代的保險が成立してからである。そして、その現代的保險こそは資本主義社會の中に初めてその合理的基礎を與へられたのであつた。現代的保險制度はしてみれば資本主義とは全く不可分な存在である。それと共に發生しそれと共に發展し、それと共に變形しそしてそれと共に消えてゆく。資本主義の機能、原則は、不可避免的に保險制度にも具體化され反映される。

資本主義社會に於ける自由競争は、それに固有に内在する必然であつた。そしてそれが獨占へ轉化してゆくことも亦資本主義社會のもつ生得的必然性である。保險企業に於ける自由競争と獨占も亦此の資本主義的必然性の

特殊なる一面であるに過ぎない。私は此の小論に於ては、保險企業の自由競争と獨占とを、此のようにとり扱つてみようと思ふのである。そして斯の如き問題の扱方こそ、唯一の科學的方法であると信ずる。保險企業家達の單なる主觀的希望から獨占を説明したい、單純に保險企業そのものの表面的便益の觀點から、自由競争そして獨占を考察したりするのでは、客觀的不可避的な鐵則としての根底を認識することは不能であらう。資本主義を基礎とし、前提とし、それから生み出されたものとしての保險制度を認識し、従つてその土臺を支配する必然性は、當然保險制度をも貫徹すること、而も如何なる具體的形態をとつて貫徹するか、充分明瞭にされて始めて吾々は、保險企業に於ける自由競争と獨占との問題が、科學的に解答されたものと云ふことが出来るのだと思ふ。だから私は本小論を次の様に構成する。

先づ、資本主義の成立が、如何に現代的保險の成立を可能にしたかを論じ、その資本主義社會に於ける自由競争と獨占が、それに内在する必然性であることをその次に分析し、この一般的必然性が、どの様に保險制度に反映して來るかの內的關聯と、具體的發現形態を最後に論述しようとする。（あらゆる形態をではなく主要な形態だけを）

私が此の小論の執筆中に早稻田大學の末高信教授が、早稻田商學に、「保險に於る集中と結合」を發表されてゐることを知つて早速一讀してみた。之は未だその一丈けが終つたのみであつて後一回で完結するものであるらしい。（註）

現在の私などが一寸手を出し兼ねてゐる諸外國に於ける保險カルテルの實例などが澤山書かれてあるので非常に利益されたのであつたが、研究の方法は全く常識的なものであつて少なからず落膽せしめられたことであつた。それには保險に於ける集中結合が實にいろいろな觀點から煩雜なまで分類されてあるのではあるけれど、その集中結合が如何に資本主義社會と內的に結び付いてゐるかの點が未だ不充分にしか説明されてゐないと思つた。外國のことは私には殆んど解つてゐないのであるけれど、日本に於いては、保險に於ける此の問題を此の様な仕方で説明してゐないのではなからうか。保險學に關する著書を見ても、何れも語り合はした様に、集中結合の問題を詳細に扱ふことをしてゐない。小島博士ですら、此の問題には氏の諸著に於いては觸れようとさへもしてゐられない。不思議なことである。斯の様なときに末高教授が此の問題をとり上げてゐられるのは全く敬服しなければならぬことだと思つてゐる。保險資本の集中結合に就いては多くの人々に依つてもつともつと研究されていゝと思ふ。

(註) 早稻田商學第九卷第二號

二、資本主義と現代的保險

“Der Reichtum der Gesellschaften, in welchen kapitalistische Produktionsweise herrscht, erscheint als eine „ungeheure Warensammlung,“ die einzelne Ware als seine Elementarform.”

此の一句は、過去六十有餘年に亙つて恐らくは幾百回幾千回となく引用され來つたものであつたであらう。誠に斯の如き諸社會に於ける富は商品の形態をとり、價值として觀念されてゐる。商品生産の發展は、價值形態の發展であり、價值形態發展の極限は貨幣に外ならない。故に「老大なる商品集積」をもつ社會は、價值關係を以て統一結合されてゐる社會であり、貨幣によつて統制されてゐる社會である。處が現代的保險制度は實に斯の如き商品生産の社會をその成立の物質的基礎としてゐるのである。私は此の點に就いてかつて次の様に書いた。

「世には保險制度が合理的基礎を持ち、飛躍的發展を爲すに至つたのは、一つの數學的發見即ち大數法則の發見に基くものだと考へてゐる人がないであらうか。唯單に、大數法則が發見され平均觀察の方法が實證されたからと言つて、そのことから直ちに、保險制度が突如として合理的になつたり、飛躍的に發展したりするものではない。交換經濟が支配的になり、貨幣經濟が一般化し、通信交通の發達が與へられてゐないなら、保險制度の合理化も、擴大も、發展も考へられるものではない。大數法則は、それが適用可能の狀態の下に於て、發見されなければならない。だから私は、非合理的保險制度の合理的保險制度（現代的保險のことを指す）への飛躍の根本原因を、數學的發見には歸せしめないで、そう云ふ發見を、保險制度の基準として適用する事を可能ならしめた、貨幣經濟の經濟生活への一般的擴充に求むるのである。」「貨幣經濟の發達は、各個別經濟の共同的均等支出の合理的手段を齎した。貨幣は正確に均等配分され、且つ保存に堪へる共同準備の構成要素として最も妥當なものである。」「個別經濟の生活を共に確保する爲めには、各個別經濟の均等分擔分の集積が存在しなければならない。」

「貨幣の形態を以てなされる保險料が即ち之に該當する。」(註)

してみれば、現代的保險は資本主義と不可分な存在であると言はなければならない。後者こそ前者の生みの親であり、従つて前者は後者の血をうけ、その魂を宿して此の世に現はれて來たものであつた。それは、商品生産の產物であり、従つて又價值關係を前提として初めてその存在が可能になつたのであつた。それ故にそれは資本主義が右すれば右へ、左すれば左しなければならず、資本主義から遊離してそれ自らの自由な發展をもつことは出來なかつた。それ自らの意志さへもつてゐないのである。だからこそ現代的保險制度を、徹底的に認識する爲めには、それ自らの本質の分析に止つてゐてはならないのである。それを終局的に規定するものにまで溯りそれとの必然的な結びつきを明かにしなければならぬ譯である。

(註) 商學討究第六卷下冊拙稿

三、現代的保險企業の自由主義

現代的保險制度の絶對君主たる資本主義とは、もつと詳しくは一體どんなものであつたか。然し私は今こゝでその特徴のすべてを、こまかく説明しようとは思はない。その必要がないのである。保險企業の自由競争と獨占との問題を考察するに就き不可缺の部面丈の論究に止める。

封建制社會に存在した商業資本、高利貸附資本は、それ自體として機能してゐた限り、封建制社會を破壊する積

極的力ではあり得なかつた。「高利貸附業も、商業も豫め與へられてゐる生産方法から搾取するものであつて、生産方法を造り出すものではなく、外部から生産方法に關係してゆくのである。高利貸附業は生産方法を絶えず新たに搾取し得るものとする爲めに、直接これを維持しやうとする。それは保守的^{〇〇}なものであつて、生産方法により悲惨ならしむるに過ぎない」だから封建制社會の資本はギルドに結成されてゐ、自由競争を排し獨占、特權、に立脚し飽くまで封建的な原則に支配されて存続してゐた。然し人間が優れたる經濟的物質的生産力を獲得するに及び、その商業資本は産業に喰ひ込み、産業資本へと飛躍した。このことを産業革命と言ふのだと私は思ふ。社會に於ける此の様な變化は必然的にその社會の富をして“Ungeheure Warensammlung”の形態をとらしむることになつたのであつた。封建的な特權は排せられ、産業の自由は確立された。資本主義社會を作り上げたのは産業資本であり、そしてその産業資本は資本家的商品を生産するのが終局の目的であり資本家的商品生産は自由競争性の生産である。それだからこそ産業資本は封建制社會の中に安住することが出来なかつたのである。個々バラバラな生産者の對立、自由競争、これこそが資本主義の發端の生きた姿であつた。

そしてこゝで又思ひ出さなければならぬ一事は、この様な産業の自由、企業^{〇〇}の自由を欲する資本主義社會こそ、現代的保險制度成立の根本的な條件であつたと言ふことである。現代的保險は生れながらにして自由の子であつた。バラバラな對立の下に生み出された、戰闘的な存在であつた。存在したその日から戰への準備をしなければならなかつた。だから現代的保險制度の發達史は戰闘の歴史でなければならぬ。そして産業資本が先づ封

建制度と戦つた如く、現代的保險制度は原始的保險制度克服の仕事から初めなければならなかつた。斯ふ言ふ保險制度の運動は根本的には、一々産業資本の運動に規定され支配されたものとして解されたとき、初めて科學的な現代的保險制度發展史が可能となるのである。

四、(イ) 自由から獨占への轉化

ゾンバルトはその著「ブルジョア」の中で言つた。「近代人は自分の企業の調革に捲き込まれそれと一緒に回轉してゐる。彼の人格的價値は存在の餘地をもたぬ。何となれば彼はそれに對して隸屬的地位にあるのだから。企業のテムポは彼自身のテムポを決定する。即ち彼は疲れを知らぬ機械の傍で働いてゐる労働者のように殆んど怠けてゐる暇がない。企業がその人を征服する力とは即ち企業を無限に擴大せしむる處の競争である。事業の發展にはもうこれでいゝと言ふ頂點がない。それは發展し擴大するかそれとも退却し死滅するか二つに一つの立場に直面してゐる」と。資本家は自己の企業を無限に擴大する爲めに競争しなければならぬ。それを敢てしない資本家は死滅する外に道がない。死を賭しての競争それが資本の魂であつた。

競争に勝たなければならぬことは絶對的である。ではその競争に勝つには。安く賣ることが出來なければならぬ。安く賣るには安く生産しなければならぬ。安く生産する根本的方法是、生産規模の擴大である。新技術の採用である。資本は斯くして立派に進歩的な役割を歴史に於いて果して來たのである。然し斯の如き必然的

運動は總資本の有機的組成を益、高むる結果になつた。即ち不變資本部分が可變資本部分に比較して壓倒的に増大することになつた。そしてそのことは一般的利潤率低落の果進的傾向をもち込んで了つた。此の傾向は一層資本家の利潤慾を刺戟する。斯くして競争に破れた資本は併合され、勝つた資本の集中蓄積は加速度的に進行した。そして勝ち残つた大資本の對立は必然的に協定することを知つた。レーニンの言ふよう。「集中はその發展のある段階に於て、いはば獨りでに凝集して獨占となる」何故なら二三十の企業であれば互に協定することが容易となるからであり、また一方では、實に企業の規模の巨大なることは、競争を困難ならしめ獨占への傾向を生ぜしめるからである」(註) 資本の自由競争は資本の集中となり獨占となつた。これが資本主義の必然だつた。何か外部的の強制によつてそうなるのではなく、資本主義それ自體の必然性がそうなのである。

現代的保險の物質的成立條件であつた資本主義は斯の様な必然的な運動によつて遂に獨占の段階に入り込んだ。然し現代的保險企業はどうなつたか。

(註) 帝國主義論、改造文庫本、二十二頁

四、(ロ) 保險販賣カルテルの成立發展

現代的保險制度の母體としての資本主義は、その必然的發展によつて獨占の段階に入らざるを得なかつたことは既述の通りである。母體に於けるその様な變化は、では保險企業に如何に具體化したか。

保險企業がその基礎を擴大發展する爲めには、先づ他の保險企業との競争に勝たなければならぬ。之は母體たる資本主義から享けた必然性だつた。その競争に勝利する爲めには、保險給付の價格たる保險料が安くなければならぬ。この如き競争の餘地は特に損害保險に於いてより多く問題であつた。即ち損害保險企業の場合に於いては、保險給付の原價が未だ數學的正確さを獲得することの不可能であつた初期に於いては、その競争は誠に破壊的であるのを免れなかつた。之が一般的商品生産に對する保險生産の特殊性であると思ふ。この特殊性は損害保險企業間に於ける料率カルテルの結成の意外に早かつたことを説明する。と言ふと保險企業の獨占なる現象が保險自體の性質から文けで説明がつく如く考へられるけれど、そうではない。何故保險企業が自由競争しなければならなかつたのかと言へば、それこそ資本主義的原則の發現だつたのであり、そしてその自由競争が獨占到至ることは、保險企業に於いても共通であるから。右特殊性は只損害保險企業間の料率協定カルテルの比較的早期の間に成立したことを説明するに止る。

今その一つの具體的實例として日本に於ける火災保險料率協定の歴史を辿つてみる。それは明治二十五年に溯る。此の年東京市神田仲猿樂町より出火し本石町まで延焼した大火があつた。所謂ロンドン大火が英國に於ける火災保險の效用への認識を深めたように、此の東京の大火は火災保險への要求を一般化する直接の刺激となつた。そこへ日清戰勝を経て設立された保險企業漸く多きを加へ明治二十九年日本酒造火災明治三十年の横濱火災の出現を機として茲に猛烈な競争が捲き起つた。保險料ダンピングが始つた。その對策として東京、明治、日

本、横濱の四大火災保險會社が公共物及び諸工場契約につき料率を協定した。處が三井物産株式會社は當時英國の火災保險會社數社の代理店として右協定会社に向つて戰を挑んだ。（資本にも亦國境なし。）此の戰は結局双方を傷け工場契約に關して料率を協定してはと言ふので會合したのであつたが、成果を見ずに解消して了つた。明治三十九年になつて日本火災と日本酒造火災の合併があり、共同火災が新に設立されて自由競争に加つて來た、當時大阪、京都、名古屋等に於ける木造瓦葺二階建店舗の火災保險料は百圓に就き拾錢若くはそれ以下に低落したと言ふことであつた。盲目的競争の激烈さが想像される。こゝで明治四十年五月東京、明治、日本、横濱、共同の所謂日本内地五大會社が料率の協定をなし第二回目の保險販賣カルテルが生れたのであつた。然し平和は長くは續かなかつた。僅か三年にして再び協定は破られた。既にその間神戸海上、浪速火災、東亞火災、福壽火災等その新設相次ぎ、加之外國保險資本の侵入する等の事實があつた。

そこで再び平和への要求が高まつた。平和とは料率の協定である。四十四年六月協定料率の改正を行ひ、神戸海上以下第二流會社は一割五分を最高限度とする料率の割引を許されたのであつた。之が所謂二率協定と世に言はれてゐる處のものである。

斯くして獲得された平和も亦翌年早くも破られるのである。即ち東邦、豐國、東洋、帝國等の新加入者の競争がそれを敢てしたのである。私は此の時の消息を、かつては某火災保險大會社の幹部たりし人の言を以て語らしむるであらう。

『豐國火災は自ら保險界の革命者なりと稱して非常なる低率を以て契約物件を吸収し斯業界を驚倒したりしかば、所謂大會社を以て高く自ら標置したりし六會社も周章狼狽爲す所を知らず忽ち協定を破壊して再び無謀の競争を惹起し今日尙ほ混沌の状態を續け居れり。』と言ふのである。(註一) 右の有様はその前年四十五年前述の五大會社に當時の新興勢力たりし神戸海上を加へた六大會社なるものが協定率勵行の宣言を社會に公表し堂々その所信の程を示した直後であつた丈けに誠に面白い。

日本の資本主義は戦争毎に飛躍したと言はれてゐる。そのことは日本の保險界にもハツキリと姿を現はしてゐることが、前述せる處から明瞭である。新設保險企業相次いで起り、自由競争の戦激烈なりしは二十九年頃からであり又三十九年頃からであつたことは、それを證明してゐる。

斯くして保險協定は破壊再建の幾變遷を経過し大正六年九月日本に於いて營業する内外會社の殆んど全部をその會員とする大日本聯合火災保險協會が成立し、そのメンバーは最低料率を強要されて今日に及んでゐる。

自由競争から獨占への飛躍は資本主義の必然性ではあるが、その獨占は然し競争を絶滅するものではない。それ處か、より大なる規模に於ける競争の再生産が伴ふ。之が資本主義の進化の眞實の姿である。そしてそれが又そつくりそのまゝ保險企業に於ける競争と獨占の眞相であつた。それが資本主義である以上資本の搾取は存在するであらうし同時に資本との對立は止まないものであらう。協定は結成されそして又破壊された。資本と労働者とは相容るゝことなき矛盾であると共に資本と資本とも亦生れながらの仇敵である。

現在は日本に於ける殆んどすべての内外火災保險會社より成る料率の協定が存在してゐるのではあるが、その協定はむしろ外形的名目的存在に化し終つてゐるのである。その結局の原因は、既に述べた様に資本の對立性にあるものではあるがより具體的に保險企業の實際に即してそのことを説明してみよう。

協定に結成されてゐる各保險資本は均等の力を有する同一の大きさではない。協定は強い力と弱い力との聯合である。問題は先づそこにある。力に於いて優劣の差等をもつ幾つかの資本が同一の價格を強要されるのが料率協定である。そしてそれが保險資本共存共榮の哲學の根據となされてゐる。然しこの事實上の結果は如何であるか。弱小資本は保險契約者の信賴薄く同一保險料を前提とする限り強大資本の保險給付を獲得しようとする。これまで明瞭になればそこから協定料率の破棄への實踐までは實に紙一重の距離である。殊に保險原價の不明確なる實狀に於いては、そのことは一層の容易さを以て實行されるであらう。アダムスミスは面白いことを言つてゐる。

“That the chance of gain is naturally over-valued, we may learn from the universal success of lotteries.” (註二)

“That the chance of loss is frequently undervalued, and scarce ever valued more than it is worth, we may learn from the very moderate profit of insurers. (註三)

協定料率を破る必然は、勿論スミスの此の如き人間性以外の處から來ること既に説明した通りなのではあるが、此の如き人間性の傾向が一つの拍車の作用をなしてゐることも亦否定出來ないと思ふ。

然しこの協定の破棄はそんなら弱小會社を救ふことになるかと言へば、そうはならない。損害額に就き結局客觀的必然性の作用が存する以上、無制限な保険料ダンピングは不可能である。弱小會社没落の必然性は茲にもある。弱小保險資本は進むも退くも只々滅亡の必然性に支配される。そしてそれこそが資本主義の鐵則である。岩をも貫く鐵則である。

鈴木茂三郎氏はその著日本獨占資本主義の展望の中で「カルテルのもつ弱點の第一はカルテル加盟の個々の會社間の資本對立である。』(註四)と言はれたけれども誠にその通りである。殊にその對立が大小の對立であるときその結果は悲劇的であること既述の如くである。

これまでの處では、資本の對立が抽象的に論ぜられてゐるが、その對立の具體的形態にまで進まなければ不完全である。今日の協定内には二つの種類の保險資本が對立してゐるのである。一は保險トラストに結成されてゐる強大保險資本であり、他は未だその様な結成を見てゐない孤立資本である。従つて料率協定内に交流する資本對立は錯雜せる形態をとらざるを得ない。孤立資本間の對立、孤立資本とトラスト資本との抗争、トラスト資本とトラスト資本との拮抗、この三通りの對立が時と所との事情に應じて複雑に作用してゐるのが日本に於ける協定の實相である。勿論料率協定の歴史が當初から斯の如きものとして出發したものではなかつた。孤立資本間の對立のみしか知らなかつた相當に長き期間をもつてゐた。然し資本主義の發展は次ぎ次ぎに新しきものを生み出した。そしてそれが又保險にも反映されて保險資本の中にもトラストなる獨占形態が現はれ(このことは節を改

めて論究する）協定の内容がそれに應じて變色されて行つたのだつた。斯くして保險カルテル、保險トラストなる二つの獨占形態がもつれ合ふ現實となつたのである。

（註一） 早川平四郎氏、火災保險講話 十六頁

（註二） キヤナン版 一〇九頁

（註三） 同 一一〇頁

（註四） 日本獨占資本主義の展望 五四頁

四、（ハ） 保險トラスト

「資本制生産の發達につれて信用制度と言ふ全く新しい一つの勢力が形成される。之は最初蓄積の謙遜な助手として忍び來り大小様々な量に於て社會の表面に分散してゐる貨幣資源をば見えざる絲によつて個々の資本家なり結合資本家なりの手に牽引して來る。それはやがて競争戦上の新たなる恐るべき一武器となり遂には資本集中を助長すべき異常なる社會的一機構に轉化されて了ふのである。」信用が一定の發達をすれば資本家的企業のため此の信用を利用することはこれ競争戦の然らしむる必然である。何となれば個々の資本家にとつて信用の利は個人的利潤率の昂騰を意味するからである。従つて信用に對する資本家の渴望は、生産規模が擴大され社會的平均的資本組成が高まり、一般的利潤率が低落すればするほどもますます増進する。

銀行は最初は支拂取引の媒介者として作用した。その授與する信用は専ら流通信用である。だが競争戦と生産

規模の擴大との發展は、資本信用を生み、信用の利用を固定資本にまで擴張せしめた。固定資本に對して授信される貸附資本は長期間信用されねばならぬ。然るに銀行の融通する貸附資本は大部分何時にても預金の引出しにあて得られねばならぬ、従つて長期信用として貸出されうるものは、銀行の手元に充分長く止まる部分のみであり、此の部分は、銀行の掌中にある總資本が大なれば大なる丈け第一には益々大となり第二には益々恒久的となる。

銀行と産業との斯の如き關係は銀行が次第に産業を支配し資本主義の中心勢力となること即ち金融資本主義の段階をもたらすことを意味する。斯くなれば金融資本家こそが資本家の支配者となる。ここで保險資本トラストが登場しなければならぬ。何故であるか。

保險資本は金融資本たる諸條件を備へてゐると言ふそのことの爲めである。金融資本家は自己の支配を確立發展せしむる爲めには、必然的に保險資本をもたなければならぬ。資本主義の必然は生産規模を擴大せしめ、そのことは資本の有機的構成を高め、即ち不變固定資本率の相對的若くは絶對的累進を來し、資本増殖の衝動はこの固定資本への信用附與を熱求し、此の要求に對しては保險資本特に生命保險資本は絶好の對象である。金融資本主義は保險資本と切つても切れぬ關係に置かれてある。そこで金融資本家は幾つもの保險資本を自己の支配下に縛りつけて了つた。これが保險トラストの近代的意思義である。日本に於ける各金融資本保險トラストの威容を左に示そう。

三菱保險トラスト

東京海上、三菱海上、明治火災、大福海上、辰馬海上、東明火災、東洋海上、明治生命
三井保險トラスト

大正海上、三井生命

安田保險トラスト

東京火災、帝國海上、太平火災、第一火災、東洋火災、安田生命

川崎保險トラスト

日本火災、帝國火災、大北火災、國華徵兵、日華生命、福德生命

住友保險トラスト

作友生命、扶桑海上

(之等トラスト資本が全保險資本に對して占むる重要さの程度に就いては「企業經營」第六卷第一號拙稿を参照して頂き度い。ここでは只保險トラスト成立の必然性だけを述ぶるに止める。) 是等の保險トラストは今後愈々その數を加へてゆくことにならう。日本最大の生命保險會社と結べる山口銀行閥がやがて金融資本への飛躍と共に有力なる保險トラストを構成してゆくであろうことも想像される。(註) 尙今日未だ銀行金融資本をもたない大倉、古河、藤田、久原等の大産業資本閥は金融資本閥に倒されるか若くは自らも金融資本へと飛躍するか何れかならなければならない。當然後者への努力がなされるであろうが、だとすれば斯の如き力が現在孤立せる保險資本へ向ふことは誠に明かである。斯くして保險資本トラスト化の傾向は益々發展せしめらるゝことゝならう。

(註) 私が本文執筆中の八月十八日附東京各大新聞夕刊は、三十四、山口、鴻池の三大銀行の合同を報じてゐる。今後この大銀行資本は從來の日本生命を中心として漸次保險資本集中に乗出して來るのではないかと思ふ。發展する爲めには、即ち他の資本に倒されまいとすれば、そうなるより外に道はないのだから。

更に此のトラスト化の傾向の拍車となつてゐるものに國家の保險集中政策がある。今日行はれてゐる日本保險業法によれば、所定の條件を具備するときは新保險會社の設立認可を申請することが出來るのであるが、それは法文がそうなつてゐると言ふ丈で、事實は認可しない方針なのであるからそれは空文に歸してゐるのである。従つて保險資本を要求する金融資本は、古き保險資本に向はなければならない。將來に於ける保險資本の機能こそは、實に興味ある研究の對象となるであらう。

四、(二) 再保險による保險資本の結合

再保險制度とはどんなものかに就いては商學討究第六卷上冊拙稿を參照してほしい。之が此の場合の理解の前提である。今簡単に言へば、再保險は社會に於ける一般的全體的損害率と個々の保險團體に於ける特殊的損害率との異差を排除仕様との努力であると私は理解してゐるのである。従つてバラバラの複數の保險會社が互に對立してゐる様な状態がなくなれば、再保險制度もその物質的根據を奪はれることになる。自由競争の前提條件、それが同時に又再保險制度の前提條件である。現代的保險が資本主義に立脚してゐる以上、再保險制度がそのなか

ら生れて來たのは全く當然な結果であつた。

保險企業間に存在する再保險形態に二つの別がある。一つは個別的再保險形態であり他は特約再保險形態である。相違する主要點は、前者は兩當事保險會社間に再保險に關して何等特別の關係の存在しない場合であり、後者は時期の長短はあれ特別の契約關係の存在を前提として再保險の賣買が行はれる場合を指すのである。學者によれば前者の形態を保險の結合と斷定してゐるのであるが、私はそれに反對である。何等かの意味の結合ではあるかも知れないが、所謂企業結合の結合ではあり得ない。その場合の一時的便宜から偶然的に再保險の賣買があつたからとてその兩者が所謂結合してゐるものだと言ふのであれば天下結合してゐない企業は殆んどなくなるであらう。それでは、特に結合と言ふことを問題にする意味がなくなるではないか。（末高教授前掲論文に私の反對する此の意見が述べられてゐる。）再保險特約に至つてはそうでない。これこそ純然たる結合と云つていい。特定會社間に再保險賣買のことが特約されて、それ等の會社は爾後特殊の關係に置かれるのだから。

五、結論——保險よりの人間開放

私は以上保險資本に於ける自由競争と獨占の主要形態を述べ、それと資本主義の必然性との關係を明瞭にし得たと思ふ。

資本主義社會に於ける節約貯蓄の思想は如何なる實を結んだであらうか。社會の各部分に散在する小額の節約

は幾何にも達しない利子を目標としてそれぞれの貯蓄機關に吸収されて行つた、そしてそれ等の集積は何處で誰の爲めに何事をなしたであらうか、資本主義は自己の内在的性質によつて發展して行つた結果は金融資本主義と變り勤勞大衆の生活を獨占價格に依存せしめた。獨占價格は資本に對する獨占利潤を保證した。斯くして勤勞大衆は自己の節約せるものゝ爲めに縛された。人間は自己の作れる神を拜しそれに支配されて行く如く自己の作れる節約に支配されてゐる。これが節約貯蓄論の輝ける結末であつた。

最近はや保險思想特に生命保險思想の發達普及が非常に高く評價されてゐる。然し金融資本としての保險資本の成長を思ふとき私は何とはなしに暗いきもちになる。多くの生命保險會社の血みどろの宣傳に追ひたてられ、未來の不幸を思ひ、節約に節約を重ねて支拂つて行く保險料は獨占資本主義の支柱となるのである。勤勞大衆は自己の貯蓄に支配され自己の支拂ふ保險料に縛される。預金と言へ保險料と言ふそは何れも異なる道筋を辿つて民衆支配の神の座へ乗る。

株式の民衆化、銀行の民衆化、保險の民衆化、是等總べては、神秘的な神殿の深き謎である。人間の利潤よりの解放は宗教からの人間解放となり保險よりの人間解放である。利潤よりの解放は資本よりの解放なくしては不可能である。だとすれば保險よりの人間解放には、資本よりの人間の解放が先づ與へられてゐなければならぬのである。

保險契約者、被保險者の限りなき群は、大保險會社へ向つて殺到する、大銀行への預金の集中と同じ様に。そ

れは自己の節約の成果を飽くまで確實に守る爲めには是非とらなければならぬ態度ではある。大銀行、大保險會社とは然し大金融資本の宮殿である。

資本主義の鐵則は人間の心の底までも左右してゐる。(一九三三―八―二十六)